

感謝が結んだ絆

陸前高田市立気仙中学校 三年 長沼 夏帆

(ながぬま かほ)

あの日、たくさんの人が涙を流し、悲しみ、つらい思いをした。そして、私は「感謝」という言葉と、この言葉の意味を知った。

平成二十三年三月十一日、東日本大震災を経験した。一瞬にして、人々の未来が変わった。私は、一生忘れない。あの時の大きなゆれと、波の音。家も学校も町も、あの日流した涙とともに消えてしまった。

避難所で配られたおにぎり。今まで普通に食べていたのに、あの時から、食べられることに感謝できるようになった。

しかし、避難した時、一つの不安が頭をよぎった。家族は大丈夫だろうか。仕事場が海に近かったお母さんのことで、頭がいっぱいになった。何人かの友達は、避難所に親が迎えに来ていた。私も、今か今かと待っていた。

次の日の朝、先生に呼ばれ、行ってみると、お母さんがいた。うれしさ、というよりも驚きのあまり、かける言葉が見つからなかった。お母さんは泣きながら、

「もう家も何も無いよ。」

と言った。私はそれを聞いて、ぼうぜんとして立ちつくした。でも私は、お母さんが生きていてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいだった。生きていてくれて本当にありがとう。

それから近くの神社へ行った。そこには、たくさんの人。そこにいたすべての人が、生きる希望を失いかけているはず、という私の思いは違った。

その日の昼食は、そうめん。男の人達が、近くにあった竹で割り箸を作っていた。女の人達は、食べる準備をしていた。そんな姿を見て、私は思った。みんな上を向いている。きっと心の中は、つらい気持ちや悲しい気持ちに違いはない。しかし、そんな思いは、そういう姿からは感じられなかった。私もいつまでも下を向いては何も変わらない。一歩前へ踏み出そう、そう決意した。そのときの私の頭の中にはなぜか「感謝」という言葉しか思い浮かばなかった。

だから私も、そうめんを配る手伝いをした。一人一人に手渡すと、だれもが笑顔を見せた。そして私に

「ありがとう。」

と言った。私がそんな言葉を言われていいのか分からなかった。でも、感謝されたと思うと、なんだかうれしかった。

そしてその日、また近くの小学校へ行くことになった。そこではカーテンを外して、寝る時の毛布代わりにした。今まで普通に布団で寝ていたことがうそのようだった。

それから私は、親せきの家で何日も生活し、しばらくして空き家に住むことになった。前の家とは違うけど、家族といられる居場所は大切な所だと思った。今まで家があるのは普通だと思っていたけど、住む場所があることに感謝して

いこうと思った。

いろんな人から支援を受け、いろんな物資をもらった。人とのつながりが、こんなにも大きく、そして大切だということに気づいた。

そして四月二十日。閉校して空いていた学校で、新たな学校生活が始まった。制服もカバンも部活で使う道具も、すべて物資。あのたくさんの物資の山を見ていたら、胸が熱くなった。

少しずつ勉強も始まり、今までと同じ生活に戻っていった。そして九月には修学旅行に行くことができた。

食べること。住むこと。学校に行くこと。家族がいること。そして、生きること。すべてのが当たり前だった私達。普通に朝起きて、学校に行って、普通に家に帰るはずだったあの日。今まで普通にしてきたことはすべて、奇跡なんだ。

今を生きているのは、多くの方々が支えてくれたから。「生きている」というよりも、「生かしてもらった。」

あの日、先生方の確な指示のおかげで私は生かしてもらった。人々の強い心によって、私は生かしてもらった。たくさんの方々の深い絆とつながりで、私は生かしてもらった。どれだけ多くの人に、「感謝」できるだろう。

絶対に忘れてはならない「感謝」という言葉。この言葉の中には、人とのつながりの意味が、深く永遠に刻みこまれている。

私は今、仮設住宅で暮らしている。たくさんの人と協力して、今を生きている。あの日から、人々の絆が強く結ばれた。

この震災で失ったものは多かったが、それ以上に得たことが多かった。

「感謝」という言葉は、この先ずっと忘れないだろう。この言葉を忘れず今を、そして明日を生きていこう。

いつかこの町が復興した時、「感謝」と「恩返し」、この二つの言葉が心の中にあるように。